

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

03

VOL.03 祖母のこと

母は毎日のように川南にある自分の母、つまり祖母のところに通っていた。

我が家からバスで10分程度。近いといえば近い。今思うと変な作りの家だった。

400坪くらいの敷地に母屋とお手伝いさん用の小さな家。

母屋には大きな玄関、小さな玄関、そして勝手口とあるのだが、よっぽどのお客さん以外は小さな玄関を使っていた。

小さな玄関に入ると、暗い、ちょっと長めの廊下が始まり、

左側にまずお風呂やトイレ、洗面などがある部屋、そして台所。

台所の左奥は田舎の家によくある物置のようになっていて、まるで蚕でも飼っているような風情だった。

台所を横目に見ながらさらに廊下を進むと突き当たりが庭に囲まれた明るい居間で、掘り炬燵があり、

僕たちが集まるのはこの部屋、と決まっていた。

居間の手前には、小さな玄関方向に2階に上がっていく急な階段と、

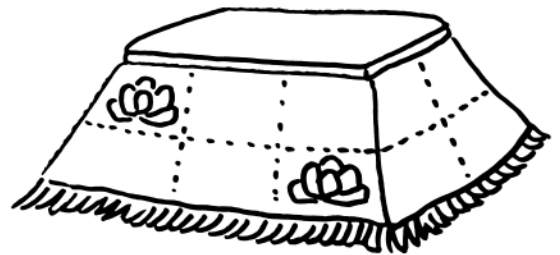
庭伝いに右に行く明るい廊下があり、廊下の右には寝室が2つ並んでいた。

どちらかが祖母の息子、つまり僕の叔父の部屋で、どちらかが祖母の部屋だったはずだ。

さらに廊下を進むと立派だけど薄暗い玄関があった。

壁に掛かっている首から先だけのクマの剥製が怖くて、

ここを通り過ぎるときだけは逃げるように早足で歩いた。



廊下の突き当たりは別のトイレ。

たぶん、お客さん用だったのだと思う。

トイレの手前から今度は庭伝いに左に行く廊下が続く、そこからは離れになっていた。

能をやっていた祖母が、仲間を呼んで稽古をしていたと聞いたが、

12畳くらいの和室がふたつ、襖を開ければ30畳近くあって、十分に役に立ったはずだ。

部屋を囲むような回り廊下も素敵だったが、欄間なども凝っていて、子供心に圧倒されるものがあった。
すきま風は吹くだろうけど、今はあんな部屋に住んでみたい、なんて思うことがある。

僕の記憶では、ここで母方の祖父と会ったことは数回しかない。

ま、昼間は仕事をしているからだ、と聞かされていたが、実際は祖母以外の女が京都にいて、
祖母はそのことでいつもどこかカリカリしていたのだと思う。

僕の母はそんな祖母の慰め役だったのかもしれない。

叔母から聞いた話によれば、いよいよ祖父がこの家を出て行った晩、
怒り狂った祖母は鉈で祖父のベッドをたたき壊したらしい。恐ろしい。そんな女だったのか……。
もちろん、子供の僕にはそんな素振りなど見せるはずもなかったのだが、
覚えている限り、聞こえてくる母との会話はいつも何かの不満だった。
それが親戚だったり、お手伝いさんだったり、いろいろだったけれど、
その元を辿っていけば祖父に辿り着いたのだろうな、と思う。

日曜になると祖母は必ず母と僕を誘って銀座に行った。
デパートに行って、決まったお店に行って、
そしてレストランでご飯を食べて帰る。
飽きもせずに毎週毎週。弟も小学生になるとそれに加わった。
新宿の時もあったけれど、圧倒的に銀座だった。
何十年かのちに、銀座の柳は庭園業だった祖父が植えたものだ、
ということを知った。ふと、祖母はそれが見たくて
銀座だったのかもしれない、と思った。

女心が少しだけ分かったような気がした。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。